



カリストス・ウェア府主教は、アメリカ正教会(OCA)の第12回全米公会(1999年)で『心を尽くし感謝して世界を神に献げ返す』という題の講演をされています。今回はその冒頭部分をご紹介します。

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

会報

2023.11.1. No.402

札幌ハリストス正教会 発行



小樽ハリストス正教会

〒062-0042 札幌市豊平区福住2条2丁目3番1号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com//>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

「爾の賜を、爾の諸僕より、衆のため一切のために爾に献りて」。これがこの公会のテーマです。皆さんもお分かりのように、この言葉は司牧者が唱えます。その時、輔祭は献げものであるパンとぶどう酒を高く掲げます。そしてすぐに聖神を呼び求めるエピクレシスへと続きます。「私たちはあなたに、あなたご自身の贈り物を献げます。しかしその贈り物とは、もともとあなたご自身のものです。私たちは全てのものと一つとなり、全てのものために献げます。」司牧者はこのように言っています。

複雑な文章です。このフレーズの中にある様々な言葉を検討していきながら、全体の意味を読み解いていきましょう。まずは「我等」という言葉です(※日本正教会訳では主語が省略されています)。二つ目に「献げる(献りて)」という言葉で

す。三つ目に「あなたのものを、あなたのものから(爾の賜物を、爾の諸僕より)」という言葉です。四つ目に「全てにおいて、全てのために(衆のため一切のために)」という言葉です。

まず聖体礼儀の祈祷文は、「私は献げる」ではなく、「私たちは献げる」となっていることに気づきます。聖体礼儀において私たちは人間としてこの上ない極上の献げものをします。その献げものを、私たちはばらばらの個人としてするのではなく、お互い関係性のある者としてするのです。真の献げものとは、人と人との関わりの中でされるものであり、対話的であり、共同的なものです。私たち人間は神のイメージのもとに造られました。それはつまり、至聖三者の神のイメージであり、ただ単に一つのお方であるばかりではなく、三つにおいて一つであるお方としての神

心を尽くし感謝して
世界を神に献げ返す

のイメージです。お互いが愛の内にある神、私たちはそのイメージのもとに造られました。ですから、もし少なくとも二つの人格が存在し(三つの人格が存在すればもっと良いでしょう)、しかもそれらの人格がお互い交わりの中にないのであれば、真の人格、つまり神のイメージのもとづく人格は存在しないのです。人間の人格に関わってくる面で言いますと、これが至聖三者の教義の基本です。人(私)が本当の意味での自分自身になるためには、相手(あなた)が必要なのです。もしこのことが人間の生活全般に当てはまるのでしたら、私たちが神に献げる聖体礼儀の献げものにおいてはなおさらそのように言えるでしょう。聖体礼儀はその本質において社会的なものです。文明化された社会では、食事とは人との分かち合いや結びつきの現れです。私たちが他者と共にパンを割き、他者に飲み物を差し出す時、それは、私たちが他者に対して心を開き、好意を持っていることを表す手段となります。Companion(仲間)という言葉の意味はあまり知られていませんが、この話の流れ上、その意味を考えてみる価値があります。comは「共に」という意味であり、panisは「パン」という意味です。共にパンを割く相手が、自分の仲間であり、同志であり、友なのです。

私達は食事を共にすることによって愛を表します。この食事を共にするという自然的、本能的な行為を、聖体礼儀は超自然的な恵みというレベルまで押し上げます。聖体礼儀は食事であり、食事は社会的なものです。私たち人間は至聖三者のイメージのもとにあります。ですから、「私」が献げるのではなく、「私たち」が献げるのです。「私たち(我等)」とは奉神礼に特徴的な言葉です。聖体礼儀で「私

(我)」という言葉が使われることはほとんどありません。聖体礼儀の最高潮はエピクレシス、つまり聖神を呼び求める祈りです。極めて重要なことなのですが、そこでは「我等・・・献じて、願い祈り切に求む」と祈られます。また、聖体礼儀の模範とされる祈りは天主経です。天主経では「我等を」という言葉が5回使われ、「我等の」という言葉が3回使われ、「我等」ということは言葉が1回使われています(※日本語の祈祷書は、翻訳上この回数と一致しません)。しかし、天主経のどこを見ても、「我」、「私の」、「我を」という言葉は見つかりません。

このことに関連してある物語が思い出されます。ドストエフスキーが「カラマーゾフの兄弟」の中で伝えている物語で、老婆と葱についてのものです。この物語は、恐らく皆さんが知っているものでしょう。民間に伝承された物語で、ドストエフスキーもそれを耳にしたのです。ある年老いた女が死に、やがて火の湖の中に入れられました。彼女は驚きました。というのも自分のことを立派な老婦人であると思っていたからです。彼女は自分の守護天使を呼び出して言います。「これは何かの間違いではないか。私はとても立派な老婦人だ。自分がこのような火の湖にいるはずがない。」

天使は言います。「ええと、それではあなたは誰かを助けた記憶はありますか？」

老婦人はちょっと考えて、「あるわ。」と言います。「畑仕事をしていた時に乞食がそばを通りかかったのだけれど、彼に葱をあげたわ。」

「素晴らしい。」と守護天使は言います。「偶然にも今、私には葱があります。」と言って、天使は自分の服の中に手を入れ、葱を取り出しました。そして天使は葱で火の湖から彼女を引っ張り出そうとしま

す。

しかし、そこにいたのは彼女だけではありませんでした。彼女がことの成り行きを見ていると、人々が自分に群がっているではありませんか。彼らは自分も引き上げてもらおうと、老婦人にしがみついているくるのです。老婦人は大いに動揺してしまいました。

彼女は叫びます。「離れなさい。離れなさい！引き上げてもらうのはあんたがたではなく、この私よ。これはあんたがたの葱ではなく、私の葱なのよ。」

彼女が「私の葱」といった瞬間、葱は真っ二つに切れ、老婦人は火の湖へと再び落ちて行き、彼女は今も火の湖の中にいるそうです。これがその物語です。老婦人が「私たちの葱」と言ってさえすれば、葱は全員を引き上げるだけの強度をもったのではないのでしょうか。けれども「私の」と言って、老婦人は自分の真の人格を否定し、さらには聖体礼儀の根本的な精神を拒絶してしまったのです。

聖体礼儀「リトゥルギア」という言葉は正確には何を意味しているのでしょうか。「リトゥルギア」は「人々の仕事」という意味であると説明されることがあります。私の理解によれば、それは語源的には疑わしいものです。しかし、神学的には確かなものです。リトゥルギアとは、分かち合われた行為であり、多くの人が共同で行うものであり、私たちが協力しなければ行うことのできないものです。ですから聖体礼儀は「リトゥルギア」と呼ばれるのです。それはつまり、礼拝中においては積極的に参加する人しかおらず、受け身で見物する人は誰一人としていない、ということです。私たち皆が、共に献げる者となります。司祭と人々が一体となり、会衆全体で献げるのです。

私にとって、この人々との結びつきが

特別な形で露わにされると思える、そのような場面が二か所、聖体礼儀にはあります。

まず、司祷者が人々に頭を下げ、それに返して人々が頭を下げる場面が三度、聖体礼儀にはあります。

一度目は、司祭と輔祭が共にイコノスタス前で準備の祈禱を唱えた後です。二度目は大聖入の直前です。ヘルヴィムの歌が歌われる中、司祷者は人々に頭を下げ、人々はそれに頭を下げ返します。そして三度目が、領聖の直前です。司祷者は再び人々に頭を下げ、人々はそれに返して頭を下げます（※復活祭の時以外はこの時基本的に王門が閉じられているので、信徒の方は見ることはできません）。

この頭を下げるという行為において、何が行われているのでしょうか。単にお互いに礼儀正しい振る舞いをするということでしょうか。いいえ、もっと深い意味があります。司祷者が人々に頭を下げ、人々がそれに返す時、司祷者は心の中で、あるいは声に出して、「兄弟姉妹よ、我を赦し給え」と言います。そして人々が頭を下げ返す時、彼らも自分の赦しを請います。互いに赦し合うということ、これが聖体礼儀という行為には不可欠なのです。他者と断絶したり、他者を遠ざけたりするのではなく、仲間と和解し、パンを分かち合う人々と共に和解して、私たちは祭壇 altar へ近づくのです。互いに赦し合い、互いに愛することがなければ、真の聖体礼儀は存在しません。18世紀の偉大なる預言者、ウィリアム・ブレイクはこのように書いています。「そして未来永劫を通じて／私はあなたを許すあなたは私を許す／我々のいとしいあがない主が言った如く／これがぶどう酒そしてこれがパンと」（梅津済美訳『ブレイク全著作』p758）

セラフイム府主教座下の着座式

ダニイル府主教座下が永眠されたことに伴い、9月28日(木)ニコライ堂にて臨時公会が開かれ、仙台のセラフイム座下が聖自治日本正教会首座主教「東京の大主教及び全日本の府主教」に選出されたことは先月号でお伝えした通りです。この決定は、同日付にモスクワ及び全ロシアの総主教キリル聖下より承認、祝福を受けました。

そして10月22日(日)、ニコライ堂の聖体礼儀の中でセラフイム座下の首座主教の着座式が行われました。札幌管轄からは私エフレム後藤の他、パルメン傳法執事長(札幌)、マトフエイ平井執事長(苫小牧)が参拝されました。



キリル総主教聖下の代理としていらつしやつたロシア正教会モスクワ総主教庁渉外局長ヴォロコラムスクの府主教アントニイ座下、またロシア正教会の神品の方々をお迎えし、日本正教会全神品の陪祷のもとに着座式が行われました。

聖体礼儀後はバスで如水会館へと移動し、そこで祝賀会が催されました。セラフイム府主教座下、アントニイ座下のご挨拶があり、また仙台のマトフエイ土田兄のお嬢さんによるピアノ演奏があり、終始なごやかに会が進行し、皆さんと共に新府主教の着座をお祝いすることができました。(エフレム)

北海道ブロック聖歌研修会

9月30日(土)～10月1日(日)、仙台函館、上磯、釧路、上武佐、札幌の各教会神品および聖歌奉仕者20余名が釧路教会に集まり、標記研修会が開催されました。

座学は初日、後藤神父様から「聖体礼儀について」、2日目は児玉神父様から「降誕祭について」の講義がありました。

実技講習では児玉マトシカ、釧路の笠原姉を講師として発声のトレーニンング方法、音階

と和音の練習および新たな課題曲

聖歌を、パートごとに実

習し、本番

の徹夜待と

聖体礼儀に

臨みました。

上磯教会の

佐藤姉も指

揮にあたり、

ご祈祷の聖

歌は素晴ら

しいものにな

りました。

※内田神父

様がユーチ

ューブ発信されていますので可能な方は是非

ご覧ください。

研修の終わりに振り返りとまとめがあつ

て日程を終了しました。

最後になりましたが会場準備に当たられた釧路教会の皆様にご心から感謝申し上げます。

(パルメン傳法肇)



婦人会見学会

今年は見学会を4年ぶりに開催しました。

秋晴れの10月11日、17名の参加で北広島にあるエスコンフィールドを見学して来ました。広い敷地内を散策した後、ファイターズガールの案内で50分のツアーに参加、普段は入ることのできないフィールドを歩き、選手のベンチで写真などを撮ることが出来ました。



その後、くるるの森で買い物、牛屋江戸八で昼食を取り、教会で解散しました。

今後の見学会、リクエストがありましたらお知らせください。（パラスケワ中野良恵）

堂役の奉仕を始めて

札幌管轄教会で堂役の奉仕を始められたコンスタンティン植田兄に、その感想を書いた

いただきました。

3年前から札幌教会で御世話になっているコンスタンティン植田です。

8月より後藤神父の下で堂役をさせていただいています。

私自身、洗礼から5年、啓蒙期間を含めると7年あまり参拝しているため、奉神礼についてはある程度理解したつもりでしたが、堂役として関わるにつれ、まだまだであったと実感するようになりました。

誦経や聖歌隊では楽譜等を見ながら進行するのに対し、堂役は祈祷書をじっくり確認する間もなく彼方此方と動き回るため、予め祈祷全体の流れを頭に

入れておく必要があります。これまでの自分の祈禱書頼りで、奉神礼が体に染み付いていなかったと



痛感しました。

それでも神父様の側での堂役は感動的（特にアナフォーラー聖変化の辺りの祈祷は、集中して聴いていると“Sense of Wonder”、としか言いようのない感慨があります）であり、したくても中々できない貴重な経験をさせていただいています。

今後も皆さんの祈りの邪魔にならないよう気をつけつつ、色々な形でお手伝い出来ればと思います。（コンスタンティン植田陽紀）

永眠

ニーナ 三浦 ニーナ姉(75歳)

札幌教会

10月10日(火)、癌のためにご自宅で療養されていた三浦ニーナ姉が永眠されました。ニーナ姉はカザフスタンで生活され、その後結婚を機に札幌に移住されたことです。15日(日)に通夜パニヒダ、16日(月)に埋葬式、ならびに納骨が行われました。ニーナ姉の霊の安息をお祈りします。

✠ 永遠の記憶